

資料紹介

## 横溝正史書簡（乾信一郎宛）について、所蔵の経緯と目録作成及び一考察

熊本県立図書館（くまもと文学・歴史館）

鶴本 市朗

【キーワード】 横溝正史 乾信一郎 新発見書簡

### はじめに

二〇二〇（令和二）年、七月～九月に、くまもと文学・歴史館において企画展「新青年一〇〇年 編集長・乾信一郎と横溝正史」を開催した。乾信一郎（本名・上塚貞雄）は、アメリカ・シアトルに生まれ、幼少期を熊本で過ごした。青山学院在学中に雑誌「新青年」への投稿がきっかけで当時の編集長であった横溝正史を知る。以後、翻訳家、ラジオ放送作家、動物作家、ユーマア作家など、作家として晩年まで活躍する。横溝正史は、名探偵・金田一耕助で知られる探偵小説作家である。「人形佐七捕物帳」シリーズなども執筆しており、捕物帳を書くきっかけを与えてくれた乾に、横溝は、生涯感謝していた。企画展は、「新青年」の編集長でもあった二人のつながりを示す展示会であった。その準備のため、当館に所蔵していた未整理の乾信一郎資料を調査していたところ、その中から横溝正史書簡二四〇通が発見された。その企画展で封筒に入ったままの書簡を展示し、二〇二二（令和三）年開催予定の企画展「没後四〇年 横溝正史展」の予告も併せて行った。書簡の発見は、毎日新聞により全国ニュースとなり、世間の注目を集めた。そして、本年、七月～九月に企画展「没後四〇年横溝正史展―探偵小説作家の素顔―」を開催し、書簡の目録を作成、公開した。本稿では、書簡が発見され、資料

整理、調査を行い、目録作成に至る経緯についての記録を残していく。また、書簡の特徴についての考察も併せて述べていく。

### 第一章 横溝正史書簡収蔵・発見の経緯

#### 第一節 岡山時代（一九四五年～一九四八年）書簡の収蔵

一九八八（昭和六十三）年一月～二月に、くまもと文学・歴史館の前身施設である熊本近代文学館で「乾信一郎展」が開催された。当時の光岡明館長が乾信一郎に展示協力を依頼し、資料の借用を行った。その中に、岡山に疎開していた頃の横溝正史書簡三二通が含まれていた。展示会では書簡が展示されているようだが、その形態、翻刻などは確認出来ない。展示会終了後、横溝正史書簡を含め、借用した書簡資料が熊本近代文学館へ寄贈された。

#### 第二節 乾信一郎の死後、資料が一括寄贈

二〇〇二（平成十四）年、乾信一郎が亡くなった。二年後、二〇〇四（平成十六）年、乾の妻・上塚千代子氏から資料が熊本近代文学館に寄贈された。その時の状況を、当時の資料受領の復命書より引用する。

平成十六年一月十四日（水）

乾信一郎宅（東京都文京区）で遺品調査・受領。  
乾の姪が案内。

午前中は、屋敷の外にある書庫の整理と、寄贈資料の選り分け。年代順に纏められた書簡と、原稿・創作ノート類を受贈。

午後は書斎の仕事机周囲に置かれた資料から受贈資料の選り分け。日記、原稿、着想ノート類を受贈。

アルバムは「青いノート」と「コロの物語」のアルバムは受贈。その他のアルバムはプライベート写真も多い為、一端借用し、必要な写真を接写した後、返却。

平成十六年一月十五日（木）

乾信一郎宅で遺品調査・受領。

書斎の本棚五棹分を整理し、梱包作業。

段ボール五九箱分を梱包した。受贈内容は、書斎の蔵書及び「青いノート」と「コロの物語」の録音テープ。猫コレクションのぬいぐるみ、小物類。受贈物の整理には相当時間がかかることを了解していただいた。平成十六年九月十三日（月）

乾信一郎夫人と面談。遺品の整理詰め込み作業。

上塚芳郎氏からは、段ボール四箱との話であったが、衣装箱（宅急便で送られるミカン箱サイズの二倍）四、五箱であったため、小さい箱に詰め直した。原稿や乾氏直筆の色紙、スケッチ帳等が目新しい資料である。また乾氏の母が保存していたと書き付けのある青年時代のスケッチの額もあり、戦前の資料が全て消失しているだけに大変貴重な資料である。

梱包し直して九個口になった。日通ペリカン便に引き取りに来てもらったが額は再度梱包し直して配送するという事になった。

それらの資料をもとに、二〇〇五（平成十七）年、企画展「乾信一郎展」

猫と青春」が開催された。その時には、猫コレクション資料などを中心に展示。横溝正史書簡は展示されていない。

### 第三節 横溝正史書簡の発見と企画展の開催

二〇一六（平成二十八）年一月、熊本近代文学館はくまもと文学・歴史館にリニューアルされた。二〇二〇（令和二年）三月、企画展「新青年一〇〇年 編集長・乾信一郎と横溝正史」を七月から開催するため、未整理の乾信一郎資料の整理を資料担当者に依頼した。資料は膨大であり、最初に書簡資料に絞って整理を行うように依頼した。担当者は、十箱を超える書簡資料の中から、サンプルとして三箱を選んで、五十音順に並べて整理を始めた。書簡は乾により年ごとに整理された状態でまとめられていた。整理を進める中で、横溝正史書簡が多数あることを伝えられた。私は、予定されていた整理の方法を変え、横溝正史書簡を全ての書簡資料から抜き出すように依頼した。それで発見されたのが、二四〇通の乾信一郎宛の書簡（一九四九年～一九七九年）であった。その資料の整理を優先するように依頼した。書簡のデータをリスト化し、写真撮影を行った。リストには以下の項目がある。資料名、副題、封筒等の種別、差出人住所、受取人住所、サイズ、日付、消印、枚数、冒頭の内容、筆記方法、インク色、状態。写真は、書簡、封筒全てを撮影した。

五月に発見された書簡資料の内容については、七月の企画展に向けて調査する時間はなかった。企画展において、横溝正史の書簡は予定通り、熊本近代文学館時代に収蔵していた岡山時代の三二通の中から前期六通、後期六通の十二通を展示した。ただ、この新発見資料については、展示会の中で紹介したいと考えた。翌年、二〇二一（令和三年）は横溝正史の没後四〇年に当たる。この年に、発見された書簡をメインの資料に据えた横溝正史の展示会開催を考えた。コロナ禍で、県境を越えた他館からの借用などができるかど

うか、はつきりしない状況であり、所蔵資料を中心とした展示会開催を考慮しておかないといけない事情もあった。そこで、企画展の中にコーナーを設け、書簡全てを封筒のまま並べ、翌年の横溝正史展開催の予告を行った。毎日新聞がそれを記事にし、全国ニュースとなった。

## 第二章 横溝正史書簡（乾信一郎宛）目録の作成

### 第一節 目録作成の意図

二〇二一（令和三）年の横溝正史展の企画として、当館所蔵の横溝正史書簡目録の作成を考えた。当館は、図書館法で運営する入館無料の施設であり、予算等の関係で、これまで図録発行ができていなかった。それについてのご意見なども多く頂いていた。横溝正史書簡を展示・公開した時には、書簡について詳しく知りたい、記録になるものが欲しいという声が多く寄せられることが予想され、書簡の目録作成を考えた。目録作成に当たり、書簡の内容に対しての関心が一番高いと考えられた。そこで、書簡の内容についても簡略に記載する目録作成を企画した。

### 第二節 目録作成の過程

二〇二〇（令和二）年十月から書簡の文字起こしの準備を開始した。書簡の画像をプリントアウトし、一通ずつにまとめて表紙をつけた。それを見ながら文字起こしを行った。記録した項目は、封筒については、差出人の住所、氏名、日付、受取人の住所、氏名、便せんについては、枚数を記録し、書簡の文面全てを文字起こしした。目録を作成するにあたって、一通ごとの書簡内容の要約も記載したいと考え、その原稿作成も同時に行っていた。展示会で書簡の内容を公開することを考慮し、文字起こしを行っていく段階で、著作権継承者へ目録原稿を送付した。文字起こしは学芸調査課で行い、鶴本が一通りの文字起こしを行ったあと、わからない文字などを課内で確認して

もらい、添削を行った。二四〇通の新発見書簡の文字起こしが終わった後、岡山時代の三二通についても文字起こしと、目録原稿作成を行っていた。全ての文字起こしが終わったのは翌年の五月初旬であった。

### 第三節 目録の構成

二〇二一（令和三）年七月から開催される企画展「没後40年 横溝正史展―新発見書簡に見る探偵小説作家の素顔―」は、当館所蔵の横溝正史書簡二七二通を中心にした展示会である。書簡は一九四五（昭和二〇）年から一九八九（昭和五十四）年のものである。横溝の戦後の活躍を紹介する展示会を企画した。書簡目録は配布だけでなく、パネル化して壁面に展示することにした。書簡の全体を見渡せるパネルがあることで、展示している各書簡がどういう位置づけになるか、来館者が一目でわかるように工夫した。展示会の構成を四章に分けたことに伴い、目録も四章に分けた。目録の第一章が、熊本近代文学館時代に所蔵していた、岡山疎開時代の三二通であった。章のタイトルを「岡山疎開の頃・本格探偵小説作家へ 昭和20年〜昭和23年」とした。この時期に横溝は、雑誌『寶石』に金田一耕助が初めて登場する「本陣殺人事件」を執筆した。その作品は、本格探偵小説作家としての横溝のスタートでもあった。目録の第二章のタイトルを「名探偵・金田一耕助の活躍 昭和24年〜昭和36年」とした。東京に戻り、金田一耕助を探偵とするシリーズを数多く執筆した時期になる。第二章の終わりの時期を何年にするか様々に考えた。金田一耕助ものの執筆が少なくなった頃を基準に考え、所蔵する書簡の数を章ごとにバランス良く配置するため、昭和36年までで区切った。目録の第三章のタイトルを「読みつがれる『人形佐七捕物帳』とした。この当時、横溝には新作の執筆依頼がほとんどなく、過去の執筆作の全集化などが行われていた時期であった。特に「人形佐七捕物帳」シリーズはこの時期テレビドラマ化されたこともあり、何度も全集化されて

いた。第四章のタイトルを「横溝正史ブーム到来 昭和49年〜昭和54年」とした。始まりの年をいつにするか考えたが、横溝が新作「仮面舞踏会」を発表する講談社の『新版横溝正史全集』の刊行が昭和49年から始まったので、その年をこの章の始まりとした。

目録には、書簡に記載された日付、枚数、内容を記載した。内容部分については、三段階で要約を行った。最初は、記載内容を全てを要約して記録していった。次に、それを百字程度にまとめていった。最終的に目録の冊子を作成する際には、より一層の字数制限が生まれ、六十字程度にまとめていった。また、書簡が書かれた時期の横溝の状況がわかるように、当時の執筆・刊行状況等という欄を設けた。そこに、雑誌連載については、作品名、連載期間、雑誌名を記入し、単行本の刊行については、作品名、刊行時期、出版社名を記入した。また、作品のテレビドラマ化や映画化についても、作品名、放映・上映時期、会社名を記入した。

#### 第四節 完成した目録

第三節の作業により完成した目録を本文末に記載した。目録のタイトルは「くまもと文学・歴史館所蔵 横溝正史書簡(乾信一郎宛)目録 昭和20年〜昭和54年 272通」である。

配布された目録には、展示会チラシ表面と佐藤信館長による「こあいさつ」を掲載した一頁、横溝正史の俳句四句を自筆の画像と共に紹介した一頁があった。

### 第三章 横溝正史書簡の特徴

#### 第一節 横溝正史と乾信一郎の関係による親密な内容

横溝は一九〇二(明治三五)年の生まれ、乾は一九〇六(明治三九)年の生まれであり、乾は横溝より四歳年下である。二人が知り合うきっかけは、

前述したように乾が「新青年」に投稿した翻訳作品を横溝編集長が採用したことによる。横溝との関係について乾が書いたものを引用する。

自分でも自分がどこへ行くのか検討もつかない。笹の小舟みたいな私であったのを、ひょいとはまみあげて筋道の立った流れへ向けてくれた人が、横溝正史さんであった(中略) 屑かごへ放りこまれるのがオチの缶詰のカラミたいな私を拾いあげてくれた横溝さんとは「新青年」時代はもちろんのこと、戦前から戦後、なくなられるまで、本当なら師匠と弟子の関係のはずなの、まるで年下の友だち扱いをしてもらっていた。あらためて指を折ってみると、昭和三年春頃に初めてお会いしてから昭和五十六年末になくなられるまで、五十二年もの長く変らないおつきあいであった。

乾信一郎『「新青年」の頃』(早川書房、一九九一年)

当時の乾は、熊本を出て、青山学院の商科に籍を置いていたが、授業に身が入らず、「ワル学生 of 札つき」で、「渋谷駅界隈のグレタ学生の頭目みたいになっていた。」(前掲書) 将来についても作家になろうとは考えてはおらず、横溝との出会いが乾の運命を方向づけたようである。そういう「筋道の立った流れへ向けてくれた」ことを乾は生涯感謝している。そして、「本当なら師匠と弟子の関係のはずなの、まるで年下の友だち扱いをもらいながら「五十二年もの長く変らないおつきあい」をしてくれたことについてもありがたく感じていた。

一方、横溝は乾が捕物帳の執筆を勧めてくれたことに深く感謝している。そのことがわかる書簡を引用する。

「不自由なき生活」などと稱して、割にノホホンとしておられるのも、コレズベテ、捕物帳の印税のおかげなんで、してみると、最初に小生に捕物帳を書く決心と機会と舞台を与へて下さったあなたに萬腔の感謝を捧げねばなりません。捕物帳を書いてなかったら、今頃は餓死せばなら

るところでした。(書簡番号2 昭和二〇年十二月十七日付)

乾の依頼で、横溝が捕物帳を書き始めたのは、昭和十二(一九三七)年頃である。その後、日本が戦時下となった時、横溝は軍部の統制により探偵小説を書くことができなくなる。探偵小説は海外の由来であり、敵性文学という考え方からであった。当時、横溝は作家として生活を成り立たせており、執筆の場がなくなれば、収入もなくなってしまう。その時に、生活を助けたのが、まだ執筆を規制されていなかった捕物帳であった。それだけに、「捕物帳の印税のおかげ」、「捕物帳を書いてなかったら、今頃は餓死せねばならんとこでした」というのは実感がこもった言葉なのだと考えられる。また、昭和四〇年代に社会派推理小説が全盛になり、横溝に執筆依頼がなくなった頃、生活を助けたのも捕物帳であり、横溝は乾に対し、生涯感謝の思いを持っていた。

このように、二人は互いの存在に感謝し、敬意を持ち合う関係であることが伺える。

横溝と乾は、探偵小説を執筆する作家であり、「新青年」の編集長を経験した編集者という共通項がある。そのことで、横溝は、自分を理解してくれる仲間意識を持つ相手として乾を見ている。「新青年」についての思いを書いた書簡を引用する。

小生は馬鹿かセンチか義理堅いのか、博文館があんなになっても、いまだに恋々たるものがあり、全フーサでゴマ化されつつも「新青年」と言へば、よい物書かにやあ ならんと努力するのであります。 武夫のため? NO!、社長のため? OH! NO NO!! ただただ

「新青年」といふ名の思ひ出のために! この名の中にわれわれの血が混ってるんですからね。(書簡番号7 昭和二十一年七月八日付)

「新青年」は「第二次世界大戦前の探偵小説の黄金時代を築いた」(ブリタニカ国際大百科事典小項目事典 二〇一四年)雑誌として知られている。

しかし、戦後は、横溝の弟である文中の「武夫」が編集長となり、探偵小説からの路線変更もあり、売れ行きは芳しくなかった。そんな状況の中で、「新青年」への思いを語っている書簡である。その熱を乾は理解してくれると考え、このような書簡を送ったと考えられる。横溝と乾の「新青年」との関わりについて述べる。横溝は一九二六(大正十五)年に博文館に入社し、「新青年」の編集を担当する。そして、翌年の三月号〜一九二八(昭和三年四月号)の「新青年」の編集長を務める。乾は、一九三〇(昭和五)年に博文館に入社し、五年間「新青年」の編集を担当し、一九三八(昭和一三)年一月号〜十二月号の編集長を務める。時期は違うが、同じ「新青年」の編集を行い、探偵小説の発展に尽力してきた二人である。また、編集を担当した年齢についても、横溝は二五歳の時であり、乾は、大学を卒業してすぐである。二人にとって、二十代の青春時代を過ごした場所がこの「新青年」にあった。

だからこそ、書簡に『「新青年」といふ名の思ひ出」という言葉があり、「この名の中にわれわれの血が混ってる」という表現が使われているのだと考えられる。そういう深い思い入れを持った共通の体験をしてきた強い結びつきが二人にはあると考えられる。ちなみに、『「新青年」と言えば、よい物書かにやあ ならんと努力する」ともあるが、後、横溝は代表作の「八つ墓村」を「新青年」に連載(一九四九年三月〜一九五〇年三月、未完のまま雑誌は廃刊)し、その思いを果たしていく。

横溝正史の次女・野本瑠美氏が書簡を読んで、「日記には書かないような内容を赤裸々に書いている」、「家族とはこんなにしゃべったりはしない。別人のようだ。」と感想を語ってくれた。横溝の日記を引用する。

八月十五日

着。角田、上塚、隆文堂検印、原田よりハガキ。

発。西田、海ノ、角田。

八月十六日

発。世界社へ契約書、海野、西田、上塚。  
着。海野。

八月十七日 日曜日

着。妹尾、アラキ、海ノより習字手本、西田。

発。海野。

夜、加藤、内田氏の招待にて飲む。

八月十八日 月曜日 晴 夕立少し

「獄門島」(第十章) 五十六枚

発。「獄門島」を送る。

着。Gめん、橋本、上塚。

八月十九日 火曜日 晴 夕立少し

着。森下、妖奇。

発。上塚、海野、西田(序文)

横溝正史「続桜日記 昭和二十二年度」(『横溝正史の世界』徳間書店、

一九七六年)

このように、出来事を箇条書きで淡々と書くのが横溝の日記の特徴である。日記にある「着」は郵便物の到着を、「発」は発送を表す。八月十五日の「着」の行及び十六日の「発」の行に「上塚」とあるので、十五日に乾信一郎(本名・上塚貞雄)から手紙を受け取り、返事を十六日に出したということである。十六日に送った手紙は目録番号24であり、便箋に六枚、乾のペンネームのことや、O・ヘンリー作品の面白さ等について書いている。十九日に送った手紙は目録番号25で、便箋に五枚、自宅の家号のことや岡山の知人とのつきあい等について書いている。いずれも箇条書きで書いている日記に比べて、手紙では、乾に対し、大変饒舌に書き記されていたことがわかる。

横溝にとって乾は、探偵小説を執筆する作家仲間であり、「新青年」に携わった編集仲間であった。また、捕物帳執筆という自分の新境地を生み出し

てくれた恩人でもあった。そういう関係の親密さがこの書簡の、作家ならではの饒舌さにつながっていると考えられる。乾という年下の、気の置けない相手に対し、思ったことを自由に語ることで、横溝は自分の気持ちを解放していったように考えられる。その部分については、更に研究を深めていきたいと考えている。

## 第二節 創作の裏側に関する記述

今回発見された書簡から、それまで知られていなかった創作の裏側について記述されたものがあつた。作家仲間である乾に、代表作「悪魔が来りて笛を吹く」の執筆について語っている書簡を引用する。

いよいよ仕事に精出さんとして、原稿紙に向ひ、「悪魔が来りて」と題と名前と、第十四章と書いたきり三日経ちました。今日は何がなんでもといふ意気込みで、本屋へ行つて本屋の親父さんが淡路の人物と聞いてたので、淡路のことを聞かんとて出向いたら留守、おかみさんに、淡路一円、須磨明石の参謀本部の地図を拝借して(売物ならず、親父さんがわが郷里のことを妻子に知らさんとて保存せしものらし)かへつて来た(書簡番号49 昭和二七年六月四日付)

引用にある「悪魔が来りて笛を吹く」の第十四章は、金田一耕助が明石、淡路島を訪れる場面である。その部分の執筆については、「題と名前と、第十四章と書いたきり三日経ちました」とあるので、三日間執筆が進まなかったことがわかる。本来なら、作品を執筆するために、舞台となる明石、淡路島について、現地へ行って取材したりするものである。しかし、横溝はそうすることができなかった。横溝は乗り物恐怖症で知られており、乗り物を使った移動が困難であつたからである。そのため、「淡路の人」である「本屋の親父さん」に尋ねて執筆をしようと「出向いた」が留守だったため、「おかみさんに、淡路一円、須磨明石の参謀本部の地図を拝借して」その場を執

筆していたことが、この書簡により明らかにになった。そういう創作の裏側を乾に語っていたことも新たに覚えてきた特徴である。

代表作「獄門島」の文体の変化について書かれた書簡を引用する。

ところで近頃小生、自分に変なこと発見した。自分の筆に、ちかごろとみにユーモア(?)味が入って来たことであります。(「ロック」に近く出る「蝙蝠と蛞蝓」ならびに、これまた二、三ヶ月後に出る「宝石」「獄門島」の第九章参照。別に参照しなくてもよいが。)これひとへに、大兄と世田ヶ谷の病人氏にせつせと手紙書いてゐたら、相手のキアヒが乗り移ってきたらしく、近頃われながら珍重してゐるしだいであります。これでいままでのジメ／＼趣味と、少しちがった筆になれさうであります。(書簡番号18 昭和二年六月二三日付)

文中の「大兄」が乾のことで、「世田ヶ谷の病人氏」がSF作家の海野十三である。当時、横溝はこの二人と盛んに手紙の交流を行っており、二人の文章にある「ユーモア(?)味」が「乗り移って」、文体が変化したと述べており、これも書簡から見えてくる創作の裏側と考えられる。

作品の構想について書かれている書簡があり、引用する。

小生実は倉敷の方で銭占いの女(上方ではこれをオガミ屋という)が殺されるところから始まるオドロオドロしき小説の腹案を、目下温めつつある(書簡番号139 昭和四七年十月二六日付)

これは、「悪霊島」で執筆された内容である。「悪霊島」は一九七九(昭和五四)年に執筆されたものであり、構想をもつてから、七年の歳月が流れている。着想当時、横溝には小説執筆の依頼がなかった。「悪霊島」は昭和五十年代の、「横溝正史の大ブーム」(小林信彦編「横溝正史読本」年譜 島崎博作製浜田知明訂補 角川書店 二〇〇八年改版)の到来以降に執筆されたものであり、横溝の遺作である。着想をもつて以来、その思いを持ち続け、執筆を果たした横溝の作家魂が感じられる。

### 第三節 その他の特徴

その他、書簡の特徴として考えられるものを以下、列記する。

- ・ 探偵作家として執筆を続けていくことにこだわる内容。
- ・ 結核と付き合ってきた横溝の体調に関わる内容。
- ・ 江戸川乱歩、海野十三、渡辺温ら、作家たちとの交流の記録。
- ・ 探偵小説文壇についての記録的側面。
- ・ 「人形佐七捕物帳」に加筆・修正をしていく過程。
- ・ 「仮面舞踏会」など、長期にわたって構想・執筆した作品の経過。
- ・ 毎年、避暑に訪れる、軽井沢の別荘での生活。
- ・ 横溝が書いた短歌、俳句。
- ・ 岡山時代の書簡の裏面に書かれた作品の草稿。

企画展の記念講演会講師の山口直孝・二松学舎大学教授が、右記以外に、次の指摘をしている。

- ・ 書簡の形態が、ほぼ同一の物を使っている。そこから見える人間性。
- ・ 当時の生活、社会状況が記録されており、時代を写し出す貴重な証言となる。

(くまもと文学・歴史館企画展「没後40年横溝正史展」記念講演会山口直孝「『愚痴』、『漫談』が伝える創作の舞台裏―乾信一郎宛横溝正史書簡の意義」 YouTube 配信二〇二一年八月二十九日〜九月二三日)

### おわりに

企画展「没後40年 横溝正史展―新発見書簡に見る探偵小説作家の素顔」において、コロナ禍のため、横溝書簡と対になる乾信一郎書簡(横溝正史宛)を所蔵する世田ヶ谷文学館に資料調査に行くことができなかった。そのため、構想していた、二人の往復書簡という形での展示が出来なかったこと

が残念であった。世田ヶ谷文学館には乾書簡が一六六通あると山口教授の報告（前掲講演会）にあった。今後、乾書簡との関連も含めて、横溝正史書簡についての研究を深めていきたい。

### 謝辞

最後になりましたが、書簡の公開を許可してくださいました、横溝正史、乾信一郎の著作権継承者・野本瑠美氏、上塚芳郎氏に感謝申し上げます。また、目録作成について、様々な助言をいただいた山口直孝氏に感謝申し上げます。

目録の凡例を次に記載する。

- ・本書はくまもと文学・歴史館が所蔵する横溝正史書簡(乾信一郎宛)二七二通(昭和二〇年〜昭和五四年)を日付順に並べて番号を付し、各書簡ごとに内容の概要を記載したものである。
- ・書簡に記載された日付を原則として記載しているが、一部、封筒の日付に従ったものがある。
- ・横溝正史の年齢はその年の満年齢を記載している。
- ・企画展「没後四〇年 横溝正史展―新発見書簡に見る探偵小説作家の素顔―」の展示構成に従い、四章に分けて記載している。
- ・旧字体は新字体に改めた。
- ・人名は最初に登場したときには姓名とも表記し、二度目以降は名字のみを表記する。ただし、江戸川乱歩、渡辺温、渡辺啓助はそれぞれ「乱歩」、「渡辺温」、「渡辺啓助」とした。また、敬称は全て省略している。
- ・俳句・短歌については全て記載した。
- ・雑誌、単行本・新聞名は『』(例『寶石』)、作品名は「」(例「獄門島」と表記した)。
- ・「当時の執筆・刊行状況等」の欄については、水谷準編『横溝正史追悼集』(昭和五七年、非売品)の年譜(中島河太郎作成)、小林信彦編『横溝正史読本』(平成二〇年改訂新版、角川書店)の年譜(島崎博作成、浜田知明訂補)を参考にして作成した。映像作品については、江藤茂博・山口直孝・浜田知明編『横溝正史研究5』(平成二五年、戎光祥出版)の「横溝正史旧蔵資料データ 年代別・映像作品シナリオリスト」を参考にして作成した。

第二章 岡山疎開の頃・本格探偵小説作家へ 昭和20年～昭和23年

| 番号 | 年               | 月  | 日  | 枚数 | 書簡内容   | 当時の執筆・刊行状況等                                |
|----|-----------------|----|----|----|--|--|
| 1  | 昭和20年(1945年)43歳 | 12 | 5  | 5  | 乾信一郎の戦争からの帰還と再執筆を喜ぶ。自分はあと一二年岡山にいる。食糧に不自由はないがタバコに困る。乾と西田政治に本を送る。岡山は防神の後背地で闇の本場。   |  |
| 2  | 昭和20年           | 12 | 17 | 6  | 乾の勧めで書いた捕物帳のお陰で暮らしており感謝。「素晴らしいキックレイトン」解説。そのラストシーンと終戦時の状況が重なる。  |  |
| 3  |                 | 3  | 17 | 5  | 探偵小説への飢餓感で、トリックを製造して書き留める。江戸川乱歩からのアメリカ探偵小説事情。探偵小説に対して猛烈な熱。   | 21年2月～22年5月「人形七捕物文庫」連載(講談雑誌)               |
| 4  |                 | 4  | 8  | 5  | 乾に外国雑誌送付、翻訳の材料に。原稿依頼来る。乾の推薦に感謝。「九州文化新聞」から随筆依頼。選定も採録説の草稿執筆。   | 21年4月～12月「本陣殺人事件」連載(宝石)                    |
| 5  |                 | 4  | 20 | 6  | 乾に送る本のこと。ガードナーを原書で読む。ディクソン・カーの小説のこと。アメリカ探偵小説を読みたい。西田から借りた本。雑誌の編集、出版事業に未練あるも作家に専念。  |  |
| 6  | 昭和21年(1946年)44歳 | 5  | 4  | 3  | ガードナーとチャンドラーに馴染み。イギリスよりアメリカの探偵小説が向上。本のお礼に漱石と『櫻の生活』を送る。政界の雲行き。  | 21年5月～22年4月「轢き殺人事件」連載(ロック)                 |
| 7  |                 | 7  | 8  | 5  | 空梅雨狂歌の見舞い。住宅事情とサレ句「禿家と楳文字で書く三代目」について。「世の中に飲ほどうるまきものはなしゲンブゲンブと生血吸ふなり」と詠み、蚊の駆除にDDT(Detective Deduction Theory: 探偵演繹理論)が必要と説く。別便で空豆を送る。「読書生」への熱い思い。「わが庵は蛇に唾になめくじら魔子ガサゴソむかて這ふなり」 |  |
| 8  |                 | 8  | 12 | 5  | 郷部神楽舞で喜ばせ執筆。大家から退去命令。水谷進不在の「新青年」に発稿。「自作に対する悪評」への対処法。   | 21年8月「蠶の首」発表(NAN)                          |
| 9  |                 | 8  | 20 | 6  | 脚組補。水谷の会に乾の名前がないこと。「読書生」編集への不満。最近の愛読書。春秋庵日雑の句を毎年秋に愛読。「いが栗の葉にととまる風説」「人恋し灯ともし頃を桜散る」。木々高太郎。海野十三に手紙を送る。  |  |
| 10 |                 | 10 | 27 | 4  | 来年は転居の積り。探偵作家に三種あり。雑誌社からの依頼に憤慨。探偵小説のエロの氾濫、類した執筆をした自分に憤慨。   | 21年10月「探偵小説」発表(新青年)、「暗闇は罪悪をつくる」発表(オール读物)   |
| 11 |                 | 1  | 19 | 5  | 体調と仕事の進行。素人芝居の台本二篇執筆、演出。小栗忠太郎と作家を巡るがことについて語り、共鳴。「New Yorker」に感銘。乾に洋書の蔵書リストを送る。   | 22年1月「薔薇より顔へ」発表(読物と漫画)、「玩具店の殺人」発表(トランプライト) |
| 12 | 昭和22年(1947年)45歳 | 2  | 1  | 2  | 新年の挨拶。郵便局のスト、本の送付を保留。全ての仕事で郵便を使う自分には打撃。今日ストが解決し、大いに執筆。   | 22年1月～2月「酒まな囃子」連載(旬刊ニュース)                  |
| 13 |                 | 2  | 12 | 4  | 手紙と本のお礼。日本人の原子力の認識。外国雑誌を入手し、広き世帯を知りたい。家を明け渡すため転居。仕事の進行。  | 22年1月～23年10月「獄門島」連載(宝石)                    |
| 14 |                 | 3  | 12 | 4  | 電力飢饉解除と郵便選配。岡山の供米成績が下位。郵便局員のストと農民諸君の思い。自分が台本を書いた。住民による芝居が好評で新たな依頼を受ける。   | 22年2月「百面相芸人」発表(りべとる)                       |
| 15 |                 | 3  | 20 | 4  | 制電解除。岡山の供米問題。麦の供出による状況変化。農民の教育向上と問題解決への提言。政府の対応。   | 22年3月～6月「双生児は踊る」連載(読物と漫画)                  |
| 16 |                 | 3  | 28 | 2  | 都会の配給続調。住宅事情について、新聞の誇張と建築の現状。哮喘以来、不自由を辛抱。気持ちちは長くなる。窮乏生活に慣れる。   | 22年4月「白羽の矢」発表(宝石)                          |



第二章 名探偵・金田一耕助の活躍 昭和24年～昭和36年

| 年               | 月  | 日  | 頁数 | 書簡内容   | 当時の執筆・刊行状況等  |
|-----------------|----|----|----|--|--|
| 昭和24年(1949年)47歳 |    |    |    |  |  |
| 33              | 9  | 9  | 4  | 被害の大きかった乾宅への台風見舞い。捕物作家クラブ名譽会員に乾を推薦。酒量を減らすことと体重について。            | 24年3月～25年3月「八つ墓村」連載(『新青年』)                         |
| 34              | 9  | 27 | 3  | 土曜会、捕物作家クラブ幹事会へ出席。亡くなった海野の後を受けて、休載せず執筆していること。                  | 24年5月～10月「女が見ていた」連載(『時事新報』)                        |
| 35              | 11 | 14 | 3  | 体調悪化で「宝石」の連載をすらす。半七塚の除幕式。捕物帳を生んだ岡本綺堂への感謝。海野は死後も後進を育てている。       | 24年8月～25年3月「左門捕物帳」連載(『日光』)                         |
| 36              | 12 | 22 | 2  | 摩訶で生活様式を変える必要。自分に合った執筆スタイルについて。仕事を減らして好きな物だけ書きたい。              | 24年12月「人面瘡」発表(『講談倶楽部』)                             |
| 37              | 12 | 25 | 3  | 大病以来、上諏訪や吉祥寺の生活から、四季の移り変わりに心惹かれる伝統的日本人であることを知る。                |  |
| 38              | 12 | 28 | 5  | クイン「チャイナ・オレンジ」翻訳について。大晦日が嫌いなこと。「宝石」を読んで怒ったこと。「年の瀬や身にしみついたなまけ餅」 |  |
| 39              | 1  | 1  | 1  | 年賀状、謹賀新年。  | 25年1月～26年5月「犬神家の一族」連載(『キング』)                       |
| 40              | 2  | 19 | 4  | 女房が体調を直す。気晴らしに月一回、女房と一緒に歌舞伎を見ることに。野村胡堂、城貞幸と捕物座談会。              | 25年11月～26年1月「八つ墓村」続編連載(『宝石』)                       |
| 41              | 2  | 25 | 5  | 渡辺温にもらったパイプのこと。歌舞伎の切符を買う苦勞。捕物帳と探偵小説に対する気持ちの違い。                 | 26年6月～27年5月「女王蜂」連載(『キング』)                          |
| 42              | 3  | 11 | 3  | 「宝石」の執筆状況。理想とする執筆ペースについて。病氣や疲勞による歯の具合について。                     | 26年11月～28年11月「悪魔が来りて笛を吹く」連載(『宝石』)                  |
| 43              | 5  | 2  | 6  | 照阿弥全集を地図を片手に読む。戦前、西国を中心に歩き回ったこと。雑誌作りが難しいことと面白味について。            | 27年1月「相撲の仇討」発表(『別冊宝石』)                             |
| 44              | 5  | 6  | 5  | 編集者と作家の関係について。捕物執筆時、東京の地理を知らないハンデイを感じていたこと。                    | 27年1月～12月「金色の魔術師」連載(『少年クラブ』)                       |
| 45              | 5  | 11 | 5  | 女房の体調が回復したこと。毎日、「江戸切絵図」を見ながら、地理学に対する興味が続いていること。                | 27年12月～28年4月「探偵小僧」連載(『読者新聞』)                       |
| 46              | 5  | 14 | 4  | 「ラジオ過」にある乾への見舞い。年暮環境と雑音の受容について。八百屋お七の狂言を読む。昔の東京の町の思い出。         |  |
| 47              | 5  | 24 | 6  | 田舎から客が数日滞在したこと。仕事をコンスタントにする意識について。自宅に泥濘が入った顛末。                 |  |
| 48              | 6  | 2  | 5  | 泥濘話のその後。近所の被害状況。告月の海野さんの命日について。水谷が文芸家協会理事となったこと。               |  |
| 49              | 6  | 4  | 4  | 「悪魔が来りて」の執筆状況について。人嫌いになった理由と劣等コンプレックスについて。                     |  |
| 50              | 10 | 6  | 5  | ヤツカイな小説を書かないといけないこと。家族のこと。飼っている猫の様子について。                       |  |
| 51              | 11 | 11 | 5  | 家族のこと。   |  |
| 52              | 1  |    |    | 新年の挨拶。今年は几帳面にいきたい。小説は休みなく書かないといけないが、疲れる。バランスをとりたい。             | 29年10月「運力座」発表(『別冊宝石』)<br>29年1月～10月「幽霊男」連載(『講談倶楽部』) |





第三章 読みつがれる「人形佐七捕物帳」 昭和37年～昭和48年

| 年                | 月   | 日  | 頁 | 書簡内容  | 当時の執筆・刊行状況等                       |
|------------------|-----|----|---|---|-----------------------------------|
| 昭和37年(1962年) 60歳 | 92  | 3  | 5 | ラシオの座談会を聞けなかつたお詫び。今年の誕生会について。今月末の土曜会、雑誌の座談会に出席。執筆意欲。                                  | 37年1月「百鬼譜」発表(「推理ストーリー」)           |
|                  | 93  | 6  | 1 | 還暦祝いのお礼状。   | 37年7月～38年2月「仮面舞踏会」連載(「宝石」)(中絶)    |
|                  | 94  | 7  | 6 | 還暦祝い出席のお礼。戦前の金沢関連の思い出。博文館時代に渡辺温と新鶏、鳥取を訪れたこと。自分の文体について。                                |                                   |
|                  | 95  | 8  | 1 | 残書見舞い葉書。  | 37年8月「日時計の中の女」発表(「別冊週刊漫画」)        |
|                  | 96  | 10 | 4 | カメラを肩にした乾の東京散策が羨まし。軽井沢に九月下旬まで初めて長逗留したこと。乾勧めのカメラを購入。撮らず終い。「長居して山荘いつか紅葉」「あるあしたわが眠憂えり鳥漆」 | 37年10月誌端化した「悪魔の百鬼譜」を刊行(東京文芸社)     |
| 昭和38年(1963年)61歳  | 97  | 8  | 4 | ナントナク中絶した「宝石」の小説を仕上げるつもりが、風邪でできず仕舞い。乗り物恐怖症が仕事の意欲を喪失させたこと。                             | 38年3月「草薙」発表(「推理ストーリー」)            |
|                  | 98  | 9  | 3 | NHKテレビに将棋の大山名人の希望でゲスト出演の依頼。ビデオ撮りの帰途、乱歩を見舞う。成城会について。                                   | 38年8月「猫館」発表(「推理ストーリー」)            |
|                  | 99  | 1  | 5 | 六義園見物について。長谷川修二の急死と未亡人への対応について。そろそろ死後のことを用意すべき。                                       |                                   |
| 昭和40年(1965年) 63歳 | 100 | 1  | 8 | 手紙に書いた「山に登った水兵」は大作として期待。「狐門島」の文体は空トボケな味、「仮面舞踏会」に取り入れたい。                               |                                   |
|                  | 101 | 1  | 6 | 大下幸雄の結婚披露パーティ。終了後、乱歩宅訪問。雑誌掲載の作品を長編にして書き下ろすこと。   |                                   |
|                  | 102 | 2  | 5 | 信州時代、乾が捕物帳を勧めた時の話。「人形佐七捕物帳」、NHKがテレビ化、講談社から全集発行の話。この機会に整理。                             | 40年2月～6月「標榜正史傑作選集」全六巻刊行(東都書屋)     |
|                  | 103 | 2  | 6 | 乾の「山に登った水兵」資料整理意手を喜ぶ。疎開で持参した資料、幼時の写真を失ったこと。NHKと講談社の仕事が決まり。                            | 40年4月～8月「人形佐七捕物帳シリーズ」全十巻刊行(講談社)   |
|                  | 104 | 8  | 1 | 近日、軽井沢へ行く。別便で「人形佐七捕物帳」を送る。  | 40年4月、11年3月テレビドラマ「人形佐七捕物帳」放映(NHK) |
|                  | 105 | 9  | 1 | 次女の結婚披露宴案内状。  |                                   |
| 昭和41年(1966年)64歳  | 106 | 11 | 1 | 乾の健康診断異常なし、「猫の小事典」順調の祝い。「鎮西落葉地に夕映えを敷きにけり」   | 43年1月～10月「新編人形佐七捕物文庫」全十巻刊行(金鈴社)   |
|                  | 107 | 1  | 1 | 乾訳クリスティーの本を受け取った礼状。   | 45年1月～10月「標榜正史全集」全十巻刊行(講談社)       |
| 昭和45年(1970年) 68歳 | 108 | 2  | 6 | 全集の月報を乾が執筆したお礼。三津木春影の思い出。出版予定のない捕物帳編集作業。昨日から全集の仕事。                                    |                                   |
|                  | 109 | 2  | 6 | 朝から晩まで読書にふける日帯のさまを時系列で示す。「八つ墓村」売れ行き不調で、第二回配本は部数減。宮田の入院について。                           |                                   |
|                  | 110 | 2  | 1 | 寄贈本の礼状。地番変更のお知らせ宛書きで体調不良。   |                                   |
|                  | 111 | 6  | 5 | 屋敷の話。酒の適量について。乾の行動力について。仕事がなくなる恐ろしさ。全集の出版状況。大相撲。プロ野球開始。                               |                                   |
|                  | 112 | 8  | 1 | 住居表示実施のお知らせ。余日に寄贈本のお礼。  |                                   |
|                  | 113 | 21 | 6 | 書齋の暖房について。講談社全集が届く。乾が執筆した月報のお礼。広瀬将、宮田と話した翻訳の難しさ。森下未下へ訃報の対応。                           |                                   |

| 番号  | 年            | 月  | 日  | 年齢  | 書簡内容  | 当時の執筆・刊行状況等                        |
|-----|--------------|----|----|-----|---|------------------------------------|
| 114 |              | 5  | 20 |     | 博文館の会は心臓の調子が悪く欠席。広瀬から、宮田入院の連絡。この季節の心臓不安の理由を後日手紙に書く。                           |                                    |
| 115 |              | 6  | 3  |     | 宮田の告別式。渡辺温の本出版に寄せて書いた宮田のエピソード。全乗手直し後、血痕が見られる。乱歩賞の候補作品を読む。                     |                                    |
| 116 |              | 6  | 9  |     | 胸の痲痺の病状について。小説執筆と違う翻訳の難しさ。乱歩賞選考会のこと。ユーモア小説と探偵小説。ウッドハウスのこと。                    |                                    |
| 117 | 昭和45年(1970年) | 6  | 23 | 68歳 | 乾のスピード翻訳完成の祝辞。乾と自分の字の違い。手の震えをおさえながら字を書くことと神経痛に。東都書房から捕物帳刊行の話。                 |                                    |
| 118 |              | 7  | 3  |     | 乱歩賞の選考会。捕物帳全集を自分で纏束。仕事がないときの様子。戸田謙介が話す「真珠郎」。原稿を書き直すクセ。                        |                                    |
| 119 |              | 7  | 11 |     | 軽井沢出発延期について。乾の手紙を何度も読む。人生哲学と仕事なき老後について。リバイバル・ブームによる刊行。                        |                                    |
| 120 |              | 7  | 17 |     | 庭の金魚の様子。軽井沢の天候と出発準備。乾のスピード翻訳出版延期。捕物全集出版。久生十蘭の発言と乗物恐怖症。                        |                                    |
| 121 |              | 7  | 30 |     | 暑中見舞い葉書。軽井沢へ移動後、咯血。   |                                    |
| 122 |              | 10 | 25 |     | 体調心配のお詫びと咯血の理由。薬と対処方法。帰京予定。体重の萎化。ウイスキーを日本酒に切りかえた。                             |                                    |
| 123 |              | 11 | 18 |     | 毎年十一月の心臓の様子と今年の違い。禁煙を始めた。全集完結のお礼。乾の仕事完了。乾と自分の仕事の状況。                           |                                    |
| 124 |              | 1  | 4  |     | 新年の挨拶。乾と西田に手紙を書くまでの顛末。冷暖房の導入と改装。捕物帳の放院予定と全集刊行。乾へ月報の執筆依頼。                      |                                    |
| 125 | 昭和46年(1971年) | 1  | 15 | 69歳 | 乾のいとこ死去。乾と自分の腰痛対処。日報執筆快話のお礼。捕物帳主演俳優林与二来訪。散歩と大相撲観戦。                            |                                    |
| 126 |              | 1  | 23 |     | 散歩の効用。ハヤカワからSF作品掲載の依頼。「新青年」に書いた「二千万年後の世界」。                                    |                                    |
| 127 |              | 3  | 5  |     | 手紙と本のお礼。捕物全集月報執筆のお礼。二十日を発売日とする理由。肩、腰、背中の神経痛。捕物帳纏束の様子。                         | 46年3月10日『定本』形佐七捕物全集全八巻刊行(講談社)      |
| 128 |              | 4  | 12 |     | 乾の仕事。捕物帳に手を入れる。(以下、入手と表記)。自宅前の下水管工事で騒音振動、砂埃に悩まされ深酒。                           | 46年4月「八つ墓村」を始めとした横溝正史作品の角川文庫版が刊行開始 |
| 129 |              | 4  | 26 |     | 乾の風邪の見舞い。道路工事。講談社から捕物全集が届く。日報のお礼。家族のこと。春先の咯血。捕物帳書き直し。                         | 46年4月10月テレビドラマ「人形佐七捕物帳」放映(NRT、東宝)  |
| 130 | 昭和47年(1972年) | 1  | 24 | 70歳 | 二週間前に咯血。正月の飲酒が原因。仕事と人生。作品への意欲。暖冬。わが家の軒端の梅。クロッカス、ヒヤシンス。芭蕉作の愛語句「春もややすがたととのう梅と月」 |                                    |
| 131 |              | 2  | 15 |     | 本のお礼。ヒガリスは嫌らしい、一度風雪で読んだ。「黒いラクダ」の翻訳をするなら、拙宅の読書所蔵の『探偵小説』が役に立つかも。                |                                    |
| 132 |              | 6  | 21 |     | 手紙と本のお礼。あじさい病に罹る、捕物帳の疲れが原因。古稀の祝い。探偵と捕物の二足の仕事があることを乾に感謝。                       |                                    |
| 133 |              | 7  | 21 |     | 乾の猫の本と自分の全集が重版。捕物全集全八巻で百四編、残りを三巻で刊行。中島河太郎が『新青年』掲載作品出版。                        |                                    |
| 134 |              | 10 | 5  |     | 乾のクリステイ翻訳が楽しみ。講談社の全集は「序にかえて」以外は中島にお任せ。読書や手紙で余生を送りたい。                          | 47年9月『探偵小説五十年』刊行(講談社)              |



| 年               | 月   | 日  | 巻 | 書簡内容 | 当時の執筆・刊行状況等   |  |
|-----------------|-----|----|---|------|---|--|
| 昭和48年(1973年)71歳 | 155 | 2  | 4 | 3    | 乾宅のTV映像の異常が回復。心臓圧迫感と就寝中止。捕物入手で心臓異常。老眼の度が進む。乾作品好調。池の水が凍る。        | 48年9月、49年12月文庫版「人形佐七捕物帳全集」全十三巻を刊行(春陽堂書店) |
| 156             | 2   | 15 | 3 | 3    | 天候の変動。家族が感冒で総倒れ。乾の本が成績良好。乾の近所と成城のビル建設による環境悪化。                   |  |
| 157             | 3   | 20 | 6 | 6    | 乾宅近くのビル工事と世相。時間の流れの違いと環境の悪化。心のハリを失っていること。捕物帳出版で無理をした。           |  |
| 158             | 3   | 29 | 5 | 5    | 乾宅の轟音、騒音騒ぎについて。家族のこと。酒量の増加と薬について。体調について。                        |  |
| 159             | 5   | 2  | 7 | 7    | 家族のこと。学校時代の過ごし方。「朝日」の「昔話」連載で酒量が増える。機関誌「推理文学」に執筆。                |  |
| 160             | 5   | 7  | 5 | 5    | クイーンのエッセイ探偵小説。「ショート・ショート」で「ミザ」とは。薬と酒量のこと。執筆と肩こり。フロンテと魔の家にカンシヤク。 |  |
| 161             | 5   | 12 | 5 | 5    | 主治医による薬と酒量の指導。「昔話」執筆で昔のことを思い出して酒量増加。ショート・ショートと、移れば変わる世について。     |  |
| 162             | 5   | 30 | 5 | 5    | 自分も乾も五月生まれ。出版依頼あり中篇と短編をまとめて二冊の長編に。最近の生活を時系列で説明。探偵小説の好み。         |  |
| 163             | 6   | 15 | 4 | 4    | 乾が早川の映画化物に取り組み。読書予定の書名7冊、プロ野球で読書が出来ない。「推理文学」に墓のことを書く。           |  |
| 164             | 7   | 1  | 3 | 3    | 仕事は老後の健康法。過去の中篇作品を書き直し、単行本にする。読書が進まない。アンチ巨人。機字章の「根性まがり」の人生観。    |  |
| 165             | 7   | 6  | 2 | 2    | 軽井沢行き。片付けておきたい仕事のこと。酒量と睡眠のバランス。                                 |  |
| 166             | 8   | 11 | 5 | 5    | 軽井沢到着。軽い咯血。松野家から手紙。咯血と薬の服用について。家族のこと。禁酒と喫煙。明日は山荘周辺の運動会。         |  |
| 167             | 8   | 24 | 5 | 5    | 咯血が治まる。家族のこと。新日本フィルのメンバーとバーベキュー。禁酒継続中。喫煙と体重。軽井沢の気遣いと服薬。         |  |
| 168             | 8   | 29 | 5 | 5    | 軽井沢の郵便配達状況。禁酒と体力消耗。長編を完結したい。人が減った軽井沢の様子。鳥の減少は農業で虫が減り、人が増えたせい。   |  |
| 169             | 9   | 28 | 3 | 3    | 軽井沢での夜具と気候。乾と自分の写真整理。写真に対して虚無的な理由。取巻二つ。禁酒と「仮面舞踏会」完結に目処。         |  |
| 170             | 10  | 5  | 3 | 3    | 手紙と本のお礼。乾の仕事が順調。禁酒後の生活状況。体調が落ち、長編は無理。スラスラ手紙を書ける乾への羨望。           |  |
| 171             | 10  | 23 | 5 | 5    | 乾の近況に羨望。禁酒後の体調と執筆、喫煙が増え痩せる。延原謙感でのこと。中学時代の同窓会へ出席し、慰められる。         |  |
| 172             | 10  | 25 | 3 | 3    | 郵便状況。延原のこと。宮田と成城会を始めた理由。軽井沢で我妻栄の告別式。水谷と会食、小説で書くゴルフ場の取材。         |  |
| 173             | 12  | 17 | 3 | 3    | 水谷と会食の報告。風邪でダウン。石油ビンチで物情騒然、用紙の逼迫。手紙の整理、書類整理の日々。                 |  |
| 174             | 12  | 24 | 3 | 3    | 郵便状況。孫の郵便局アルバイト勤務とスト破り。原稿用紙を大量に見直し、安心。現状の逼迫を、戦時の記憶で乗り切る。        |  |

第四章 横溝正史アトム到来 昭和49年～昭和54年

| 年   | 月 | 日  | 級 | 書簡内容   | 当時の執筆・刊行状況等                            |
|-----|---|----|---|--|--|
| 194 | 7 | 5  | 1 | 東京文芸社が『探路荘の殺人』を第一巻として金田一耕助全集を出す。講談社も再度全集刊行し、中島の編集で初期作品が入る。 | 49年5月～50年11月文庫版『横溝正史長編全集』全二十巻刊行（春陽堂書店） |
| 193 | 9 | 3  | 7 | 台風見舞い。乾の雑誌執筆編集、異常なし。乾の手紙を起るの仕事に発奮し、今年中に三百枚の長編の執筆を練る。       |  |
| 192 | 8 | 25 | 3 | 乾の心臓異常が正脈に。NHK「思い出のストーリー」視聴で過ぎ去った時を思う。乾の手紙の「特水時代」の経緯を味わう。  |  |
| 191 | 8 | 14 | 5 | 乾が冷房病、心臓病への心配。軽井沢で鳥の鳴き声を聞く。「空石傑作選」の名前貸し。豊京子定。孫のお供で参詣。      |  |
| 190 | 8 | 10 | 5 | 乾の手紙の子供とアリのエピソードに驚愕。軽井沢のアカハラが窓に衝突して死ぬ。乾が筆を飲み込んでいた。         |  |
| 189 | 7 | 30 | 1 | 暑中見舞い葉書。軽井沢の気候と服装。   |  |
| 188 | 7 | 13 | 1 | 予定通り軽井沢へ。雨と霧。涼しさを通り越して電気ゴタツ。疲れが出たのでユツクリ静養。                 |  |
| 187 | 7 | 7  | 3 | 七月一日のお富さま。脳軟化症の不安。原稿を三度読み直しても誤字・脱字を発見。軽井沢の出版延期とその理由。       |  |
| 186 | 7 | 1  | 5 | 長篇完結でお祝い。延原夫人が来訪し、夫の近況報告と、映画「恍惚の人」について。八日に軽井沢へ発つ。          |  |
| 185 | 5 | 20 | 5 | 乾の結婚四十一周年。自分の結婚式の様子。八陽会（神戸二中の同窓会）出席と眼鏡購入。海野の展覧会。角川の接待。     |  |
| 184 | 5 | 16 | 3 | 身の上話は鬱めになる。角川へ渡した原稿を返還交渉。原稿を渡した心境。「仮面舞踏会」完結で執筆計画と肉体的負担。    |  |
| 183 | 5 | 11 | 7 | 栗尊以来の友人からの手紙。西田に百まで生きると予言。長篇の進捗状況とそれを角川へ渡した騒動。家族のこと。       |  |
| 182 | 4 | 10 | 4 | 禁酒解禁で酒量上がり嗜血。嗜血しやすい理由。長篇執筆状況。自作は探偵お伽話。ユーマ小説鑑賞。父の思い出。       |  |
| 181 | 4 | 8  | 3 | 乾と水谷が趣味の本を出すことへの義理。自分の小説作りの才能は枯渇。乾と自分の庭の動物たち。桜を見る。嗜血が続く。   |  |
| 180 | 3 | 15 | 4 | 手紙と藝の教示へのお礼。裏について書いた「推理文学」を回封。西田に刺激されて発意を始めた。乾の仕事に敬服。      |  |
| 179 | 3 | 11 | 5 | 乾の叔父と西田が八十代で元気。神戸二中の同窓会に出席、デパートを見て経済大国を感慨し、「飄然たる不逞」が生まれる。  |  |
| 178 | 3 | 6  | 4 | 今年の気候とわが家の梅。寒さと漠然とした不安（昭和十三年頃の気持ち）。推協会報の岡戸武平「悲喜交々」記事貼付。    |  |
| 177 | 1 | 15 | 1 | 葉書。乾の『オクラホマ巨人』を受け取ったお礼。                                    |  |
| 176 | 1 | 12 | 2 | 本のお礼。自分の本は二番煎じ、送々に廻る本を作りたい。書庫、抽斗の整理で血癆。今年は年男なので何かやりたい。     |  |
| 175 | 1 | 1  | 1 | 年賀状、謹賀新年。  |  |

| 番号  | 年     | 月  | 日  | 枚数  | 書簡内容   | 当時の執筆・刊行状況等   |
|-----|-------|----|----|---|--|---|
| 195 | 昭和49年 | 9  | 15 | 3   | 翻訳の苦心談、良い翻訳とは。軽井沢に若い人たちがいること。引き揚げ前の障り支度。この夏は「迷路荘」書き直し。 | 49年11月～50年7月『新版榎正史全集』全十八巻刊行（講談社）。第一回配本は書き下ろし長編「仮面舞踏会」     |
| 196 | 10    | 2  | 3  | 予定通り帰京。庭の花。栗の実、メダカ、虫、鳥。軽井沢のクサヒバリ。留守中にたまつた郵便物や荷物の整理。     |  |   |
| 197 | 11    | 1  | 5  | 山村が奥軽井沢に家を建て完全隠居。車が発達し、軽井沢利用が四季に拡大。夏に棟梁に任せた暖房化の完成を見に来る。 |  |   |
| 198 | 11    | 13 | 5  | 帰京。「心臓の季節」。信州ヘドライブ。二十代に鎌倉に住む。若者が観光地が多いこと。必死虫林氏出現の戯文執筆。  |  |   |
| 199 | 11    | 24 | 6  | 乾毛の庭に鶯が来訪。庭の鶯、ヒヨドリ、オナガ。講談社の接待の日、明治神宮を拝観。全集発売開始。家族のこと。   |  |   |
| 200 | 12    | 4  | 5  | 乾の仕事について。全集の刊行状況。家族のこと。全集を中島に任せたこと。                     |  |   |
| 201 | 12    | 8  | 5  | 中学時代、モツサリと呼ばれていた思い出。西田、江戸川、森下に教われる。神戸市役所、第一銀行神戸支店に勤めた。  |  |   |
| 202 | 12    | 12 | 5  | 小学時代、養育時代、西田徳重と兄・政治との出会い。角川書店のパーティ出席のため二日酔い。ハミダシモノ意識。   |  |   |
| 203 | 1     | 1  | 1  | 年賀状、謹賀新年。   | 49年12月角川文庫版著作三百万部発行                                    |   |
| 204 | 1     | 13 | 6  | 角川書店のパーティ出席。中島と山村しか面識がない。劣等感で酒量が増える。全集配本を送る。乾に著書手帳を依頼。  |  |   |
| 205 | 1     | 16 | 5  | 手紙と本のお礼。以前NHKの人形佐七捕物帳のパーティを赤面小心恐怖症で欠席。劣等感は中学時代のモツサリから。  |  |   |
| 206 | 2     | 28 | 5  | 風邪で熱、咯血と続いた理由。全集送付が遅れた顛末。新聞にウッドハウスの死亡記事。知人の死亡通知の電話。     |  |   |
| 207 | 4     | 8  | 5  | 乾の禁煙解除と翻訳完成間近。「迷路荘」の佳人完成と執筆に至った経緯。完成の満足感より自己嫌悪で疲れ。      |  |   |
| 208 | 5     | 3  | 4  | 咳血の季節、自責で小康状態。事業頓挫、神経衰弱が出て物真な日々。岡田村へ森下が来た際のタバコ奇談。       |  |   |
| 209 | 5     | 7  | 5  | 乾の翻訳長篇完成。「新青年」の頃、延原との翻訳談義。未完の完結と、中篇を長篇にする時の執筆姿勢。軽井沢へ行く。 |  |   |
| 210 | 6     | 11 | 4  | 二週間の軽井沢滞在。乾が猫を通じて外部と交流。本職以外のつきあいを待つ意識。自分は仕事外のつきあいは皆無。   |  |   |
| 211 | 7     | 7  | 4  | 乾のトリア物の執筆状況。全集で刊行した「仮面舞踏会」「随筆集」「白蟻変化」について。軽井沢行きの準備。     |  | 50年7月「パノラマ島奇譚」と「陰翳」が出来全話出版（幻影城増刊）<br>50年7月『探偵小説年誌』刊行（講談社） |
| 212 | 8     | 6  | 7  | 乾の執筆と、カメの子愛育について。軽井沢で執筆が進まない。八という数字に縁起をかつく。知人の死亡連絡と対応。  |  |   |
| 213 | 8     | 31 | 6  | 乾、西田の規則的な生活。自分も万歩計で散歩。俄に人気作家となり疲れ、執筆出来ない。小林信彦との対談。全集発送。 | 50年8月角川文庫版著作二五冊が五百万部発行                                 |   |
| 214 | 9     | 6  | 6  | 乾が馬車の翻訳。子供時代の馬車にまつわる父の話。「迷路荘」で金田一を馬車に乗せた。二輪馬車の秘密を翻訳。    | 50年9月映画「本陣殺人事件」封切（ATG）                                 |   |
| 215 | 9     | 22 | 6  | 馬車の思い出。「新青年」時代の翻訳苦勞話。近鉄の後期優勝で知人と電話。マスコミ対応で軽井沢滞在延長。      |  |   |



| 番号  | 年               | 月  | 日  | 数  | 書簡内容  | 当時の執筆・刊行状況等   |  |
|-----|-----------------|----|----|----|---|---|--|
| 238 | 昭和52年(1977年)75歳 | 11 | 30 | 10 | 乾の仕事の状況。PR誌の「私の健康法」の取材対応。乾の奥さんの銀杏の落ち葉掻き。私大ミステリ・クラブの取材。              | 52年12月『裏説金田一耕助』刊行(毎日新聞社)  |  |
| 239 |                 | 12 | 6  | 10 | 乾の仕事に啓蒙される。互いに相手を「心の寄りどころ」に。飲酒と体調。家内の体調と生活。散歩で見た成城の銀杏並木。            |   |  |
| 240 |                 | 1  | 7  | 4  | 正月の意味が昔と変わってきた。自分はゴミの中から生まれた作家。朝、毎、読、日刊スポーツの新聞購読と読報記事。              |   |  |
| 241 |                 | 1  | 16 | 4  | 乾夫婦と猫十匹の正月。集中力を失う。四十年前、上諏訪での子供たちの戦意高揚の歌を思い出す。戦争への思ひ。                |   |  |
| 242 |                 | 1  | 25 | 5  | 『金門橋』寄贈のお礼。日課の散歩。初めてタバコの自動販売機を使って得意。行きつけの喫茶店。本屋で乾の著書発見。             |   |  |
| 243 |                 | 2  | 1  | 3  | この季節の心臓不安。乾の不眠症、手紙を見る度に不安。乾の肉親によい医者がいる。発作は突然襲った寒波のせいかな。             |   |  |
| 244 |                 | 2  | 15 | 3  | 菜種梅雨で寒い日々。本のお礼と仕事が続くことへの羨望。風邪をひき気管支まで潰す。去年の日記、毎夜同じと苦笑。              |   |  |
| 245 |                 | 6  | 16 | 3  | 電話した日は二日不眠。ウイスキーで眠れた。本のお礼。今は物憂く物臭い。長篇に傾倒懊悩。書き始めたら手紙を送る。             |   |  |
| 246 |                 | 7  |    | 1  | 昏中見舞い葉書。七月十八日に軽井沢へ来た。   |   |  |
| 247 |                 | 9  | 25 | 7  | 帰京報告。乾の『クリスタイ自伝』完成に敬意。翻訳五十周年の記念事業。新作長篇の執筆計画。散歩、散髪、出立。               |   |  |
| 248 | 昭和53年(1978年)76歳 | 10 | 7  | 5  | 早川のクリスタイ・フェアは乾の翻訳が目玉。初めて会った時の思い出。肺結核完治の喜び。新作長篇の原稿を渡した。              | 53年2月『病院坂の首纏りの家』刊行(角川書店)<br>53年2月映画『女王蜂』封切(東宝)<br>53年4月〜9月テレビドラマ『横溝 正史シリーズII』放映(MBS・TBS系) |  |
| 249 |                 | 10 | 11 | 5  | 長男から映画「ナイル殺人事件」CM出演依頼。この作品はクリスタイが戦時下に執筆。谷崎も「細雪」を戦争中に書く。仕事を続ける意味と喜び。 |   |  |
| 250 |                 | 10 | 23 | 4  | 新聞に玉川の訃報。泰下夫婦を囲む会で玉川と会った時の思い出。本位田が彼と眠る。水公夫人重体の電話。乾が母校へ揮毫を贈る。        |   |  |
| 251 |                 | 10 | 29 | 5  | 乾の叔父・上塚司の逝去から思い出すこと。乾の揮毫が母校の講堂に掲示されるのを喜ぶ。乾の大学時代の話が面白い。              |   |  |
| 252 |                 | 11 | 11 | 6  | 軽井沢で新長篇が第三回まで進む。乾が毎日散歩。乾と初めて出会った時の思い出。大隈薬師時代の思い出。                   |   |  |
| 253 |                 | 11 | 13 | 3  | 乾の入院、手術に驚く。次の仕事の合間なので静養を。奥さんの心痛を思う、励ましの言葉を伝えて。                      |   |  |
| 254 |                 | 11 | 29 | 3  | 手術に臨む乾への気遣い。入院の翌晩、奥さんと電話で話し、体調を崩した理由を聞く。自作の映画に出演して、風邪をひき寝込む。        |   |  |
| 255 |                 | 12 | 26 | 3  | 乾の奥さんから退院を聞き喜ぶ。乾が翻訳五十周年、『クリスタイ自伝』は永久に残る記念誌。来年はマイ・ペースで仕事を。           |   |  |
| 256 | 昭和54年(1979年)77歳 | 1  | 4  | 3  | 郵便事情。乾の経理顧問。本屋に『クリスタイ自伝』が並ぶ。本日より本腰入れて仕事。なかなか佳境に入らず苦悶。               |   |  |
| 257 |                 | 20 |    | 2  | 仕事が一気済、散歩から帰ると快気祝いが届き、お礼。乾の養えた体力回復が先決。春、仕事に専念出来るのを祈る。               |   |  |



